

## はしがき

私は地理学徒の一人です。地理学は何かをモノサシ（指標）にしていくつかの地域を比べて、それぞれの地域が固有に持つ性格（地域性）を明らかにする科学です。私は四〇年余りの間、近世に著作された農書が記述する農耕技術をモノサシ（指標）にして、農書が著作された地域の性格を明らかにする作業をおこなってきました。この本は、三河国で近世に著作された農書を使って、私がこれまでおこなってきた諸作業の方法と、明らかになったことを、読者各位に披露するために編修しました。

四〇年余り前、私は現代の農業をモノサシ（指標）に使って、各地域の性格を明らかにする作業をおこなっていました。そして、行き着いた所が、「日本の農耕技術の歴史の中で、今の農業をどのように位置付ければよいか」の疑問でした。

この疑問を解く鍵はなかなか見つかりませんでした。ある日、大学生協の本屋に古島敏雄著『日本農学史』という表題の本が置いてあったので、書架から取り出してパラパラめくっていくと、近世の章は「農書」と称する史料を使って、農耕技術の発展過程と地域性がわかりやすく記述されていました。まさに「目からウロコ」で、これが近世農書との出会いです。

農書の技術から地域性を明らかにする作業をおこない始めて五年ほど過ぎた頃に、愛知県新城

市図書館が所蔵する、『農業時の葉』という表題の手書き本と出会いました。その内容は、三河国平坦地の環境に適応する木綿の耕作法を、宮崎安貞が著作した『農業全書』と対比する方式で記述した、天明の飢饉の頃に著作された農書でした。

『農業時の葉』が記述する内容は、特に進んでも遅れてもいない、中進地の農耕技術であることと、どのような天候の年でも適度な量の農作物を収穫するための技術を披露していることでした。前者は三河国の農耕技術の地域性を明らかにできるデータ、後者は天明年間の不順な天候に適応しつつ、一定量の農作物を収穫するための技術の内容がわかるデータです。農書研究をおこなっている仲間に尋ねても、後者の視点で著作された農書は、ほかにはないようです。『農業時の葉』についてはⅢとⅣに記述しますので、ご覧ください。

この本は、これまで私が著作した近世農書に関わる六冊の本から、三河国の地域性を説明できる農耕技術を記述する章を拾い出し、刊行後に新たな史料を見つかったり、内容が適切でない記述がある場合は加除修正して、編修しました。この本に引用した史料と文献名は、末尾に掲載してあります。

古希の節目を越えた私には、三河の農書研究を続けられる気力と体力がありません。この本を踏み台にして、三河の農書研究を始める若者が現れるのを待つことにします。

## I 近世三河の農書類と農耕技術の水準

### ●——農書について

近世以降の日本における農業経営の基礎単位は、単婚家族からなる家であった。農書とは、個々の農家ごとに普及が可能な、在来のものより進んだ営農技術を普及させるか記録するために著作された、個別経営のための農耕技術書のことである。農書のほとんどは、それぞれの著者が長年の営農経験にもとづいて、言及する地域の環境に適応しつつ、安全の枠内で最大の収穫を得るための農耕技術を記述した、経験科学書である。農書のうち、近世に著作された農書を近世農書と呼ぶ。その著作期の上限は一七世紀後半とされており、近世後半、とりわけ一九世紀に入ってから著作者が多い。

なぜ中世までは農書は著作されなかったか。古島敏雄はその理由として、中世までは生産力の発展が集団的な慣行として維持されていたので文字にする必要がなかったこと、中世までは文字を書ける人が少なかったこと、風土の異なる中国農書の翻訳では説きえない要素を日本の農業は持っていたことの三点をあげている。

近世に入ると、農書が著作される条件が揃ってくる。中世までは村に住んで農民を支配していた小領主層が、近世になると城下に移住したために、領主と農民が直接向かいあうようになって、

【表1】三河国の農書および農事記録類一覧

史料名	著作地名	著者名	著作年	翻 刻
百姓伝記	矢作川下流域？	未詳	1681-83	日本農書全集16, 17
農業時の栞	宝飯郡赤坂村	細井宜麻	1785	日本農書全集40
農業日用集	渥美郡吉田	鈴木梁満	1805	日本農書全集23
農民常心衛置事	北設楽郡下津具村	村松与兵衛	-1816	早川孝太郎全集7
浄慈院日別雑記	渥美郡羽田村	三代の院主	1813-86	郷土研資料叢書9-13
農業夜咄	三河国？	未詳	未詳	近世地方経済史料4
徳作書	額田郡切越村？	未詳	1861	岡崎市史史料19
歳時記	額田郡土呂村	伊奈可兵衛	近世末	岡崎地方史研究紀要12
地方用心集	三河国？	未詳	未詳	愛知県史別巻

領主側に営農指導書が必要になったことと、貢租の村請制によって村役人層の筆記計算能力が必要になったことよって、先にあげた中世までは農書が著作されなかった理由のうち、一番目と二番目の理由は消去される。

また、近世後半は既存耕地を高度に利用する農法が普及していく時期であった。飯沼二郎は、発展段階が異なる農法間の較差が大きかった時期に、遅れた農法を否定して先進的な農法を普及させるために、農書が著作されたと記述している。

ここに、中国農書 of 思想と書式を一部には継承しつつも、それぞれの地域の性格に適応した農耕技術を記述する農書が著作される基盤が構築された。

### ●——三河の農書と営農記録

筆者は「地域に根ざした農書」が記述する農耕技術から、その舞台になった地域の性格を明らかにする作業をおこなってきた。「地域に根ざした農書」とは、個々の農家ごとに普及が可能な農耕技術を記述していることのほか、次の四つの条件を満たす農書である。

- ① 著者は長年の営農経験を踏まえて著作していること
- ② 言及する地域の範囲が明らかなこと
- ③ 言及する地域への技術普及を目的にしているか、それが目的ではなくても、言及する地域への技術普及が可能なこと

#### ④ 農作物の耕作技術を記述していること

筆者が知る限り、三河国に住む人が著作したか、著作したと推察される農書およびそれに類する史料は九つある。表1はそれぞれの概要である。これらのうち、「地域に根ざした農書」の四つの条件を満たす農書は、『農業時の栞』と『農業日用集』である。ここでは、九つの史料それぞれについて記述内容の特徴を説明する。なお、史料中の文章を引用する場合は、その末尾に記述ページを記載する。

『百姓伝記』は、近世農書の中でも古い時期に著作された農書のひとつであり、個々の農家の営農の規範になる農書と地方役人の手引書である地方書の性格を併せ持つ史料である。『百姓伝記』は、著者が言及する地域の範囲がほとんどわからない。三河国西部の矢作川流域が舞台であろうとされているが、そうであると断定できる根拠はないので、今のところ『百姓伝記』は「地域に根ざした農書」ではない。

『農業時の栞』は、細井孫左衛門宜麻が長年の作物の試験栽培経験と土地の老農への聞きとりにもとづき、木綿作を中心に、三河国の風土に適応した農耕技術を、三河国の百姓たちに語り聞かせる問答形式で著作した農書である。したがって、『農業時の栞』は先にあげた四つの条件をすべ